

黥面土偶から黥面絵画へ

From Tattooed Clay Figurines to Pictorial Representations of Tattooing

設楽博己

はじめに

① 黥面土偶から黥面絵画へ

② 黥面絵画Cの新資料

③ 鳥装の戦士とイレズミ

④ 畿内地方の空白

おわりに

【論文要旨】

弥生時代には、イレズミと考えられる線刻のある顔を表現した黥面絵画が知られている。いくつかの様式があるが、目を取り巻く線を描いた黥面絵画A、目の下の線が頬を斜めに横切るように下がった黥面絵画B、額から頬に弧状の線の束を描いた黥面絵画Cがおもなものである。それぞれの年代は弥生中期、中～後期、後期～古墳前期であり、型式学的な連続性から、A→B→Cという変遷が考えられる。Aは弥生前期の土偶にも表現されており、それは縄文時代の東日本の土偶の表現にさかのぼる。つまり、弥生時代の黥面絵画は縄文時代の土偶に起源をもつことが推測される。黥面絵画には鳥装の戦士を表現したものがある。民族学的知見を参考にすると、イレズミには戦士の仲間入りをするための通過儀礼としての役割があったり、種族の認識票としての意味をもつ場合もある。弥生時代のイレズミには祖先への仲間入りの印という意味が考えられ、戦士が鳥に扮するのは祖先との交信をはかるための変身ではなかろうか。畿内地方では、弥生中期末～後期にイレズミの習俗を捨てるが、そこには漢文化の影響が考えられる。その後、イレズミはこの習俗本来の持ち主である非農耕民に収斂する。社会の中にイレズミの習俗をもつものともたないものという二重構造が生まれたのであり、そうした視点でイレズミの消長を分析することは、権力による異民支配のあり方を探る手掛かりをも提示するであろう。

はじめに

筆者は1990年に「線刻人面土器とその周辺」と題して、弥生時代後期から古墳時代前期に瀬戸内地方から関東地方の広い範囲に分布する定式化した人面絵画を集成し、考察した〔設楽 1990〕。この論文に対して寄せられた批判のいくつかには不十分ながらも答えたつもりである〔設楽 1995〕。批判の答えで問題にしたことのひとつが、この絵画と縄文時代の黥面土偶との関係である。ところが、この2年の間に相次いで重要な関連資料が発掘され、黥面絵画の系譜、縄文土偶との関連性に関する筆者の考えは改めざるを得ないことになった。本稿はこの点について集中的に考察する。また、かつての論文ではふれることができなかった、イレズミが成人男子の戦士としての標識であるとする吉田晶の説〔吉田 1985〕に対しても考えるところがあるので、今回とりあげさせていただいた。その際、この数年間に増加した新資料を紹介し、前稿の補足もかねておく。

本論に入る前に、前提としておきたいことに関して述べる。それはイレズミの習俗の存否問題である。筆者は線刻人面絵画を黥面、すなわち顔へのイレズミを表現した絵画と考えたが、その点が批判の対象になった〔辰巳 1992〕。イレズミの習俗は、皮膚の残る遺体が出土したり、あるいは骨にまで残るイレズミの施術の痕跡が確認されないかぎり、考古学的にその存否を決定することはできない。それ以外は文献を含めた間接資料からの類推にとどまる。しかし、文献資料の内容と、比較的近似した時代の考古資料である人物埴輪との関連性や、さらにさかのぼる考古資料との表現形態の類似性、継続性などを吟味することにより、日本列島のイレズミの習俗は、少なくとも3世紀（本稿の黥面絵画Cの時期）まではさかのぼると考えている。この点に関しては、旧稿〔設楽 1995〕を参照されたい。

本稿はそれを前提として、イレズミを施した人面絵画—黥面絵画—の源流が縄文時代の土偶にたどれることを示し、黥面絵画の消長の意味に解釈を加えたものである。

①……………黥面土偶から黥面絵画へ

本稿を執筆するきっかけになったのは、縄文時代の土偶と3世紀の黥面絵画の間を埋める資料の出現と、それに伴う既存資料の再評価である。まず、そのことを新たな資料を中心に述べていきたい。

加茂岩倉と上鎌子例 島根県加茂町加茂岩倉遺跡の39個の銅鐸のうち、29号銅鐸には、鈕に人の顔が描いてあった（図1-3）。頬には弧線が、口元には斜線が描いてある。頬の弧線はほっぺたが膨らんだ様子を表現したものでなければ、口元の線とともに通常の顔面表現以外の特殊な線とみななくてはならない。眉の位置に2本の弧線があるが、よくみると両端は接しておらず、とくに下の線の末端は不必要なほど下までのびている。上の弧線が眉の表現であり、下の弧線は頬の線とつながって目を取り巻くように施された特殊な線の表現ではないだろうか⁽¹⁾。想像をまじえながらもこのように考えるのは、本例と福岡県前原市上鎌子遺跡出土の板に描いた人面表現との関連性が指摘できるからである。

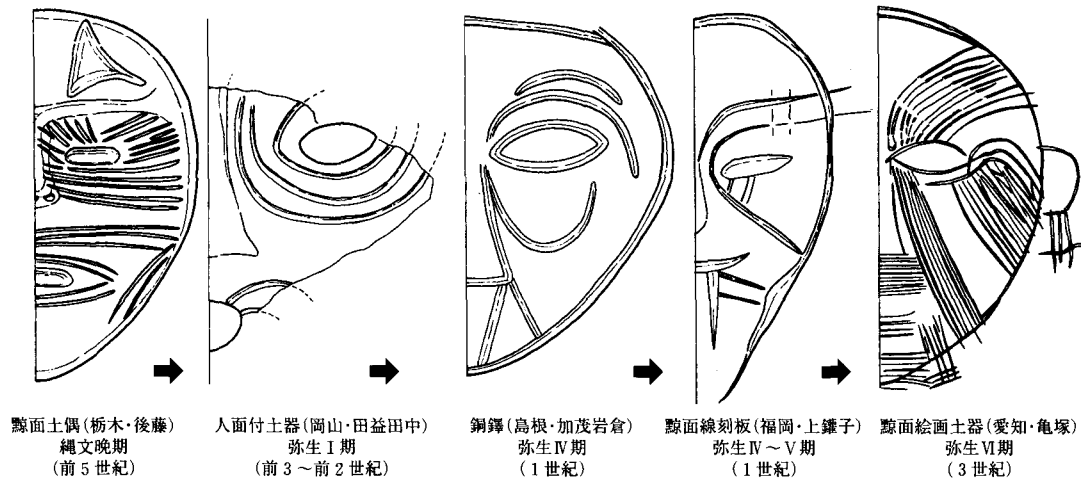


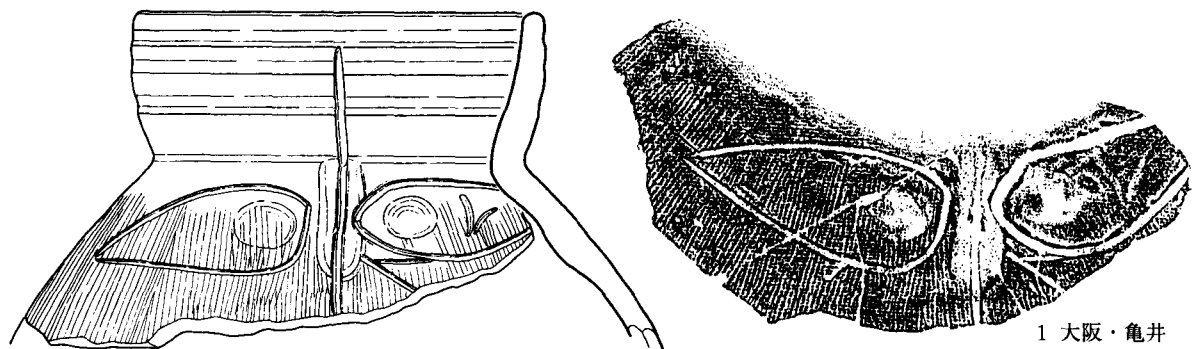
図1 黥面土偶から黥面絵画へ（縮尺不同・顔の半分を图示）

上罇子遺跡から出土した葉書大の板に、上半身の人物像が線刻されていた [岡部 1997]。眉の下から目のわきをとおり、頬を斜めに横切る弧線が左右対称に描かれている。眉や目の下にはこの弧線とつないだ縦の短線が2～3条施される。口の下には3条の縦線が入れられ、さらにそこから斜め横に2～3条の線がのびている (図2-2)。

そこで比較の対象として問題になるのが、筆者がかつて扱った3～4世紀の黥面絵画である。代表的な愛知県安城市亀塚遺跡の例をあげて説明すると、目の下には頬にハの字の線の束があり、それが目を通り越して額に弧状にのびている。全体としては向かいあう弧状の線の束の表現になっている。顎には横と縦に線の束を描いている (図2-3)。

黥面絵画の3タイプ 上罇子例は頬からの線が眉の下に描かれることで加茂岩倉例と共通し、頬の線がハの字状になることで亀塚例と共通する。まさに両者の間を埋める資料といえよう (図1)。いずれも顎にも特殊な線をもつことが、これらの親近性を物語る。年代的には加茂岩倉例がⅢ-2式銅鐸に描かれていたので弥生Ⅳ期 (1世紀前葉)、上罇子例がⅢ～Ⅳ期の土器を出す遺物包含層の上層から出土したので弥生Ⅴ期 (1世紀後半) に近い年代が与えられるという。3世紀の亀塚例にいたるまで、ほぼこの順に推移したとみてよいのではないだろうか。そこで、加茂岩倉例のように目を囲む線刻をもつものを黥面絵画A、上罇子例のように左右対称の分銅形に弧線が引かれるが、眉の下に線がくるものを黥面絵画B、亀塚例のように額から頬に分銅形に左右対称の弧線が引かれるものを黥面絵画Cとしておきたい (図2)。

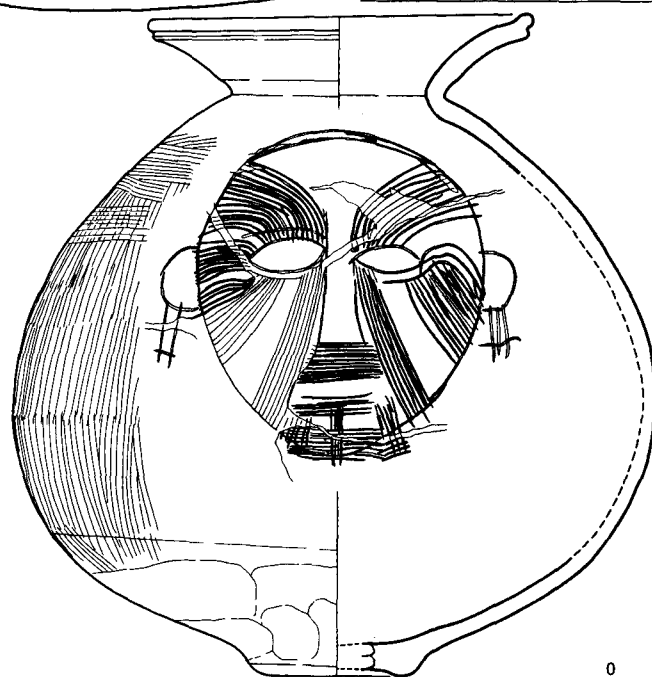
黥面絵画Cの類例は旧稿のように数十例知られるが、Bはいまのところ上罇子例だけである。Aはすでに報告されている大阪府八尾市亀井遺跡の類例がある (図2-1)。直立した口縁に凹線文をもつⅣ期の水差し形と思われる土器の胴上部に、指でくぼめて目をつけ、その間に同じ手法で鼻を表現する。目の回りを沈線で囲み、鼻の中央に縦に沈線を加える。佐原真は目の回りの線が目の輪郭で、中のくぼみが虹彩 (黒目) であり、珍しくも虹彩を表現した弥生人面絵画だとして、弥生時代に通例である虹彩を描かないことに反する資料だと考えるが [佐原 1997]、これを目を囲む特殊な線と理解すれば例外ではなくなる。通常描かれる目の輪郭は杏仁形であるのに対して、これは水滴形であり、そうした点からもこれを目の輪郭とは見なしがたい。



1 大阪・亀井
(黥面絵画A)



2 福岡・上罐子
(黥面絵画B)



3 愛知・亀塚
(黥面絵画C)

図2 黥面絵画A・B・C (1・2=1/2, 3=1/3)

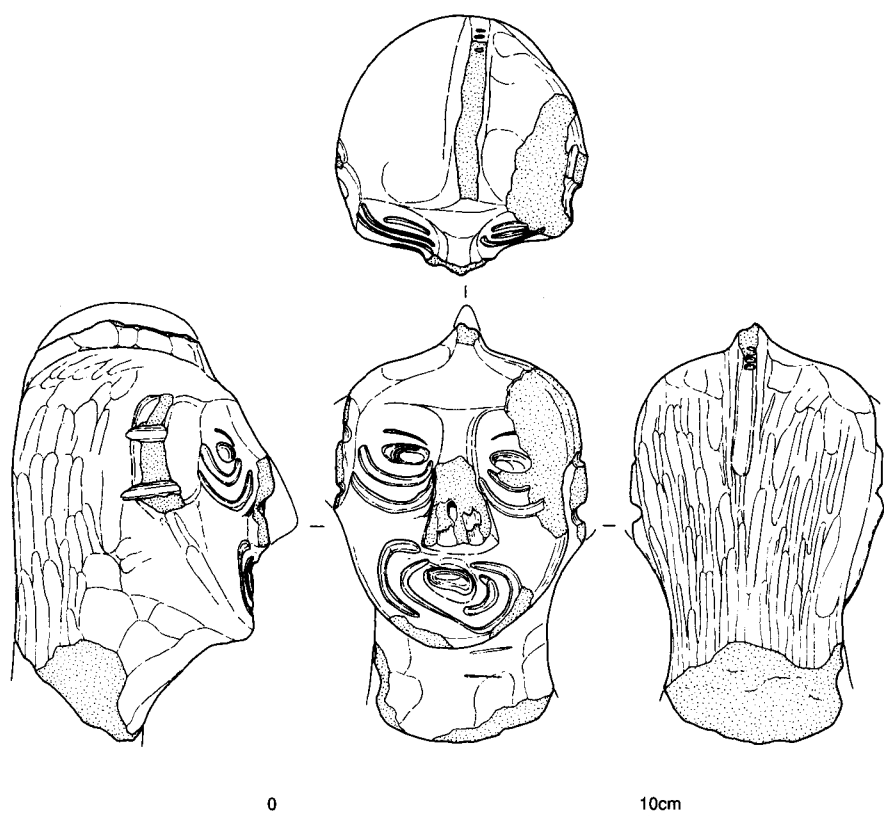


図3 黥面土偶（香川・鴨部川田）

田益田中と鴨部川田例 黥面絵画Aの特徴であった目を囲む線は、さらにさかのぼった弥生I期後半の資料にみることができる。岡山県岡山市田益田中遺跡の河道埋土から出土した土器は目と口に穴が開けられ、鼻は粘土を貼り付けて作りだすが、今ははがれ落ち、目も上半を欠いている。目の下に3条の弧線が引かれている。外側の2本は途中で止まっているのがわかるが、内側の1本はおそらく目を取り囲んでいるものと思われる。口のわきに弧状の沈線がのび、その下にも1本の沈線が見える（図1-2）。土面とされているが、小形の壺形土器の腹部に顔を表現した人面付土器とみたほうがよいのではないだろうか。

同様の線刻をもつものが、香川県志度町鴨部川田遺跡の環濠から出土した土偶である〔香川県埋蔵文化財研究会1992〕。この土偶は頸から下を欠いているが、現存する部分でも高さ11センチと大形である。目の下に2条の弧線を目と並行につけ、口の周りにも2条の弧線を左右対称につけている。この土偶の大きな特徴は、頭の頂部に隆起帯をもつことで、顔面の線刻とともに、この土偶が信濃から尾張・三河地方に分布する黥面土偶のうちのある種のものの影響下にあることを明示している（図3）。

そうした系譜関係を念頭に置くと、田益田中例の口のわきの沈線も、黥面土偶と関係の深い土偶形容器の表現（図4）をまねた可能性が考えられる。この二者はいずれも遠賀川式土器にともない、胎土や焼成などから地元でつくられたことは明らかである。これらの集落は、縄文土器の系譜のもとにある突帯文土器をとまなわない。縄文文化を代表する土偶やその顔面表現を受け継いだ土器が、

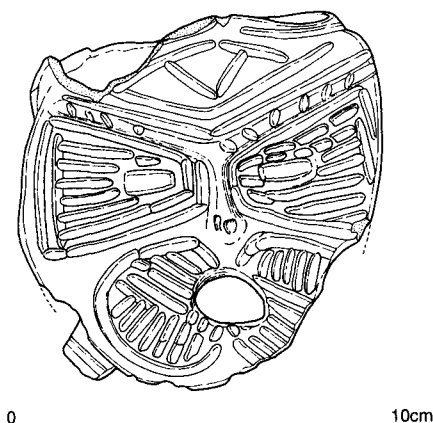


図4 愛知・矢作川河床出土
土偶形容器

大陸系弥生文化の集落でつくり使われていることは、きわめて興味深い。山口県下関市綾羅木郷遺跡から出土した弥生I期の土偶の頬に数条の弧線が引かれているが、これも黥面土偶のうちのある種のもの要素を引き継いだ可能性がある。

イレズミの系譜 黥面土偶は、縄文晩期後葉から弥生前期に関東から中部地方を中心に分布する、ある一定の様式で顔面に多数の線を引いた土偶とその系譜下にあるものである。有髯土偶とも呼ばれており、筆者も黥面土偶をその名で考察したことがある〔荒巻ほか1985〕。そう呼んだのは、愛知県渥美町伊川津遺跡の典型的な黥面土偶などが、

古くから有髯土偶と呼ばれていた学史に則ったためである。しかし、女性をかたどった土偶にもこの顔面表現があるからヒゲとは考えにくいのと、おそらくそれはイレズミを表現したのではないかと思うので、黥面土偶と呼びかえたほうがよいだろう。

今回の考察により、3世紀の黥面絵画の起源は、縄文時代の黥面土偶の表現にたどれる可能性が出てきた。弥生I期とIV期の資料の間、およびIV期とVI期の資料の間にはまだ懸隔があるが、図1に示した系統的連続性はほぼ間違いないものと思われる。これは絵画表現の連続性にすぎないが、その背後にはイレズミ習俗の連続性がともなっているものと推測される。

これまで筆者は黥面絵画Cの系譜を縄文時代の土偶の顔面表現に求める意見に対しては、「本稿で扱った系統のものも含めた西日本の弥生V期にみられる資料も、II～IV期の資料がとくに西日本で皆無の現状では、縄文文化の系譜か否か、にわかには断定できない」とし、むしろ黥面土偶や土偶形容器などの顔面表現の型式変化は黥面絵画Cへと行き着かないのではないかと考え、系統が違うとした〔設楽1990〕。柴垣勇夫は、関東地方など東日本の土偶形容器や人面付土器が亀塚遺跡などの黥面絵画Cを生み出し、それが瀬戸内方面へと広がったと考えた〔柴垣1988〕。黥面土偶と黥面絵画Cをつなぐ資料が登場したので自説を修正し、黥面絵画Cの系譜は東海地方を含む東日本の弥生文化、ひいては縄文文化にたどれることを認めたい。

しかし、二者をつなぐ資料が九州方面に存在していることから、柴垣説の後半部分はまだ慎重に考える必要がある。ここでは二つの可能性を提示したい。一つは縄文時代の黥面土偶の直接間接の影響で、伊勢湾地方や瀬戸内、あるいは九州地方といった広い範囲に黥面絵画Aが生まれ、それが黥面絵画Cに変化した、という考え。もうひとつは、瀬戸内方面に弥生I期に伝播した黥面土偶が黥面絵画Aを生み、それが黥面絵画Bを経て黥面絵画Cに変化した時点で伊勢湾地方にまで広がった、という考えである。この判断は資料の増加を待たねばならないが、次章で黥面絵画Cの新資料を紹介した後、後者の考え方にもとづき、黥面絵画Cの成立の背景について推論してみたい。

②……………黥面絵画Cの新資料

岐阜県大垣市今宿遺跡例 遺物包含層から、黥面絵画を3個描いた壺形土器(図5-1)が見つ

かった。⁽⁴⁾ 2個の土器破片の絵画はつながるが、もう一片は接点をもたず、別個体かもしれない。しかし、絵画の配列からするとこの壺には3個ないし4個の黥面が描かれていたものと思われる。壺形土器は頸部に櫛描文とその下に列点文をもつもので、包含層の出土土器と合わせて考えると、廻間Ⅰ式後半である。黥面絵画は愛知県安城市東上条⁽⁵⁾や静岡県静岡市栗原の例と似ており、鳥が翼を広げたような顔の輪郭をもつものである(図5-4)。亀塚の卵形の顔の輪郭のものとはタイプが異なる。それぞれ今宿タイプ、亀塚タイプとしておく。なお、黥面絵画とともにバチ状文や弧帯文が描かれている。

愛知県一宮市八王子遺跡例 河道から大量に出土した木製品のうち、鳥形木製品に黥面絵画Cが描かれていた[赤塚1997]。鳥形木製品は、長さ9センチ、幅3センチ、厚さ3ミリほどの板で、側面からみた鳥をかたどっている。人面は鋭い刃物で刻まれており、顔の右半分しか残っていない。つまり、黥面絵画を線刻した板を再利用して鳥形木製品をつくったのである。共伴した土器から、廻間Ⅰ式と考えられている。輪郭がないのでよくわからないが、鼻の付近の表現は東上条例とよく似ており、今宿タイプと思われる(図5-2)。

愛知県新川町阿原神門遺跡例 金森康明によって造成現場から発見された⁽⁶⁾。ハケメがよく残った壺形土器の胴上部に黥面絵画が描かれている。顔の輪郭を欠いており、鼻から下と顔面左側の下半分を欠失しているが、額から頬の線と、目の縁から左に延びて下方に流れる線束の表現は、今宿例によく似ており、今宿タイプである(図5-5)。一緒に採集された土器は、廻間Ⅱ～Ⅲ式が主体になるようである。

愛知県清洲町朝日遺跡例 瓢形壺形土器の胴上半部に、頸の部分の線刻⁽⁷⁾だけを取り出して、バチ状文とともに描いている[石黒1994]。赤塚次郎は廻間Ⅰ式と考えている。

愛知県安城市宮下遺跡例 ハケメのよく残る壺形土器の胴部破片。顔の左側上半部が残る。顔の輪郭は丸く、目は半月形で、目尻から横に線がのび、頬にハの字の線刻が3本ある。額には頼りない線が3本上にのびている(図5-6)。表現は岡山県鹿田例に似ている。

愛知県安城市楠遺跡例 前回は記述だけであったが、今回図化させていただいたので掲載した(図5-3)。顔の上半であり、頭の頂部に輪郭がみえる。目は小さな半月形で、額から鼻に分銅形の線を描くが、粗雑で単線になっている。

愛知県安城市亀塚遺跡3・4例 前回提示した亀塚1・2例以外にも黥面絵画土器片があるので、資料化させていただいた(図5-7)。いずれも甕形土器に頸の部分の線を単独で描いたものであり、あるいは同一個体かもしれない。

岐阜県からの出土は初めてだが、それを含めた新たな資料はいずれも伊勢湾地方のものである。今宿タイプが発見例を増し、出現期である廻間Ⅰ式にさかのぼることが確認された。その反面、亀塚タイプは1例も増加しておらず、香川県仙遊例と共通性をもつこの地方では特殊なものである可能性が考えられる。伊勢湾地方以東に伝播したり影響を与えたものが今宿タイプで、それが伊勢湾地方の主流をなしていたことが確認できた。亀塚1例は旧稿では欠山式と考え、その表現形態からも伊勢湾地方におけるプロトタイプとしたが、廻間Ⅱ式だとする意見⁽⁸⁾もあり、再考の余地がある。仮に廻間Ⅰ式にさかのぼるとすれば、この地方には今宿と亀塚の二つのタイプが同時に現れたことが指摘できる。また、朝日例のように黥面を構成する要素の一部分だけが取り出され、それが単独

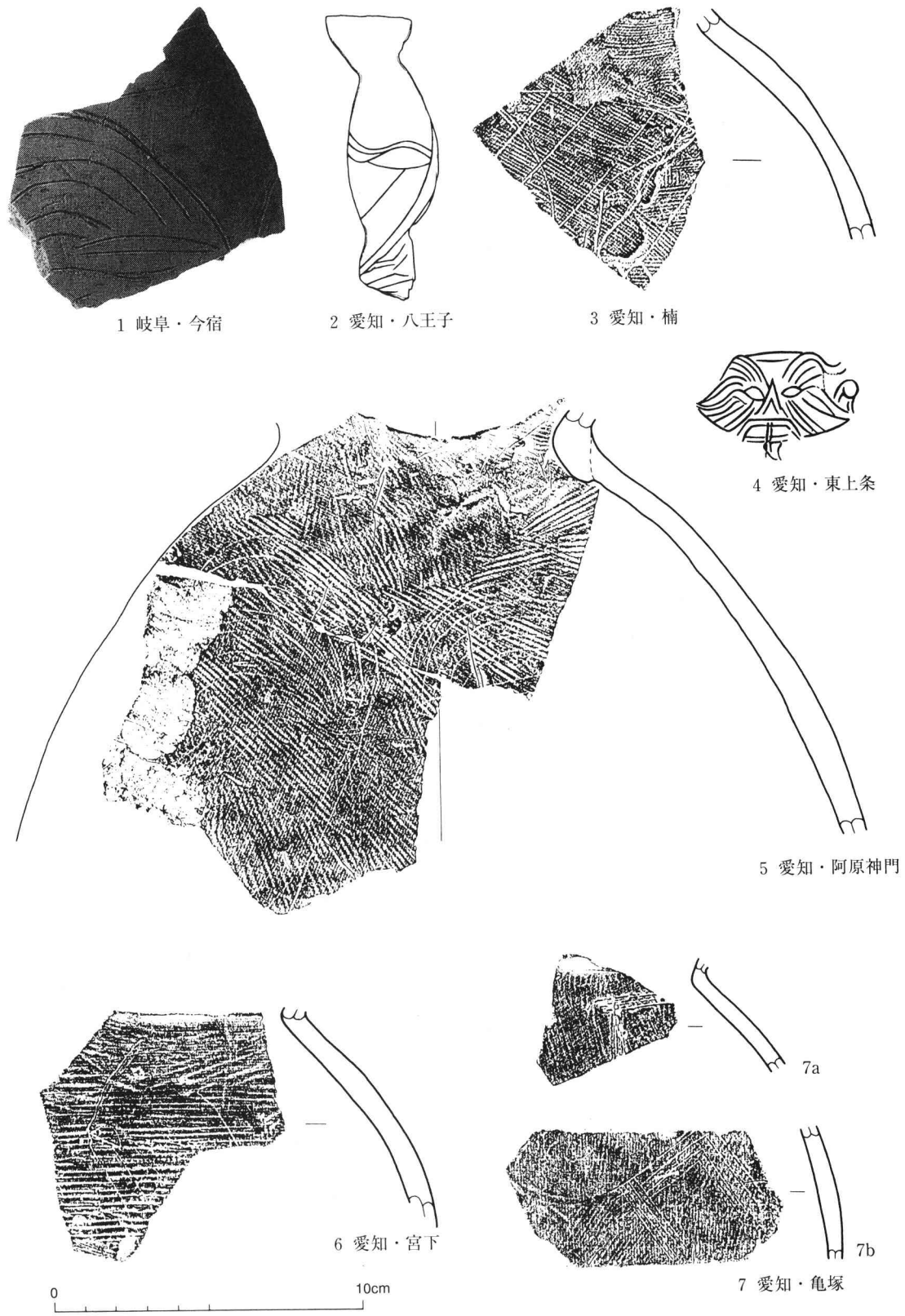


図5 黥面絵画

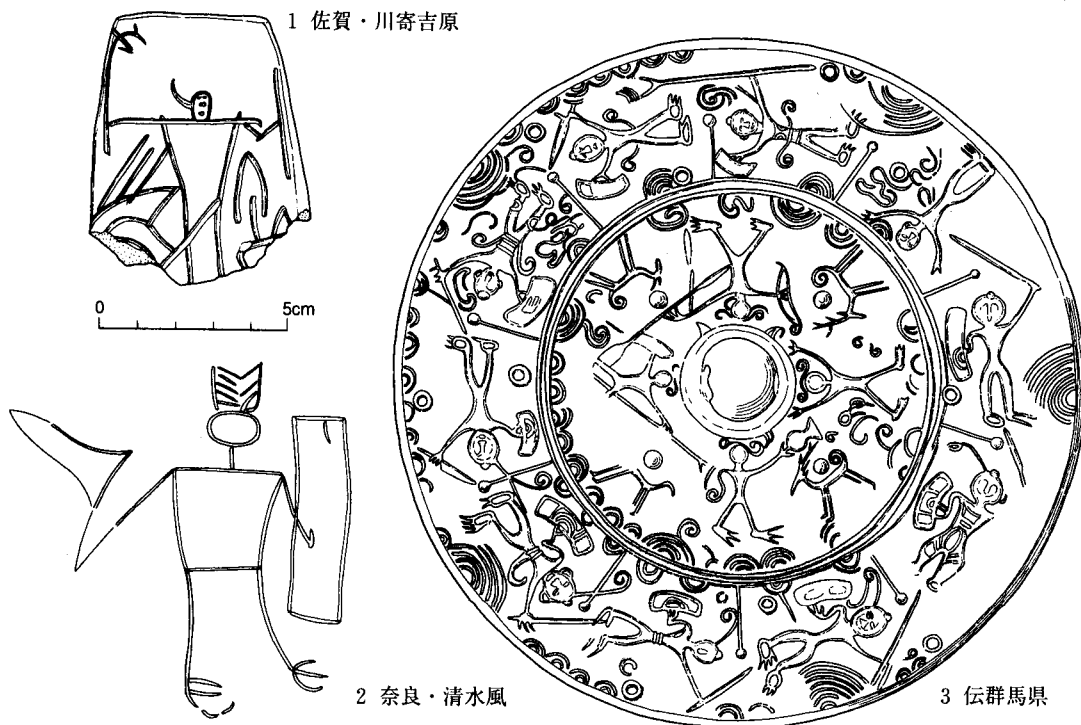


図6 戦士の絵画・レリーフ（2は約10/11，3は約1/2）

で描かれることも黥面絵画Cの成立当初からあったことを指摘しておきたい。

③……………鳥装の戦士とイレズミ

上鐘子例の解釈 再び上鐘子例に戻り、その用途などを推定することから、イレズミの意義を考えるてがかりとしたい。上鐘子例の頭部右側には角のような飾りが表現されている。一般にこうした頭飾りは、鳥装の表現とされている。報告者の岡部裕俊も指摘するように、この表現は佐賀県神埼町川寄吉原遺跡の銅鐸形土製品の人物にも認められる（図6-1）。川寄吉原例は右手に戈を、左手に盾のようなものを持ち、腰に剣をさし、左わきには銅鐸のようなものを下げている。頭飾りばかりでなく、右手が水平にのび、左手がやや下方に下がった状態も上鐘子例は川寄吉原例と同じように表現している。地理的にも年代的にも近似したこの二者は、ある同じポーズを描いたものと考えてよいだろう。したがって、上鐘子の人物が武器を持っていた蓋然性は高い。右手の上に見える三叉状の彫り込みが、握っていた器物の端である可能性が指摘されている〔岡部 1997〕。

そこで注目されるのが、奈良県天理市清水風遺跡の土器に描いた人物絵画である（図6-2）。右手に戈を、左手に盾を持っており、川寄吉原例と同じ組み合わせである。清水風例は大きな冠のような頭飾りをつけ、足も水鳥のように3本の線で大きく表現されている。この足の表現で思い起こされるのは、伝群馬県出土の狩猟文鏡の絵画である（図6-3）。狩猟文鏡といっても、実際に表現されているのは戦士の模擬戦あるいは舞踏の場面であり、外区の人物が手に持つのは刀や剣と盾で

ある。そしてこれらの人物は頭や腰に羽飾りをつけ、足に大きな爪を表現した履物を履いている。鳥に扮しているのは間違いない。4世紀の鏡だが、表現された光景は前1～1世紀の絵画と共通する〔設楽 1993a〕。

鳥装の表現から、こうした私たちの人物は司祭者とされる。そして持ち物が武器だから、これらの人物は祭りにかかわる戦士を表現したものと考えられる。弥生時代に本格化した戦いと戦士の役割の重要性を、弥生人は絵画にしたのであろう。報告によると、上鐘子の板が出土した泥炭層からは、盾のほか槍形、矢形、矛形などの武器形木製品が多数出土したという〔岡部 1997〕。戦士の像を表面に刻んだ上鐘子の板は、盾のミニチュアと考えられないだろうか。

僻邪の目と黥面絵画 C の成立 旧稿では、この種の遺物の出土状況や顔のイレズミと瞳のない杏仁形の目から、黥面絵画の意義は僻邪であると考えた。イレズミは、漁撈活動に従事する水人が海に潜るとき、魔物に襲われないようにつけたものだという記述が「倭人伝」にある。また多くの民族誌からみても、イレズミに僻邪の役割があることは疑いない。杏仁形の瞳のない目は福田型銅鐸につけられた目とも関連する。銅鐸は稲の祭りに関わる祭具であり、邪悪なものが寄り付かないように僻邪視文を描いたという解釈がある。佐賀県鳥栖市柚比本村遺跡からこのことを考えるうえで興味深い資料が出土しているので、参考にとりあげたい。それは銅鐸形土製品であるが、その鐸身に相当する部分のやや上に杏仁形の目と思われる線刻がある。目を鋳出すことのある福田型銅鐸は九州産という意見があり、製品は山陰、山陽地方に分布する。こうした動きと連動して、北部九州の黥面絵画 B が瀬戸内に黥面絵画 C を成立させたと考えたい。そして、3世紀に伊勢湾地方に伝播した。イレズミの習俗自体は、瀬戸内地方でも伊勢湾地方でも、縄文時代以来連続していたのであろう。そうでなければ絵画の伝播だけで亀塚例のような写実的な表現が出現するとは思えないからである。しかし瀬戸内以西で黥面絵画 C の成立にいたる系譜が追える反面、伊勢湾地方では土偶形容器や愛知県貝殻山貝塚の特殊な土製品を含めても、黥面絵画 C を生み出したと積極的にいえる考古学的な証拠はない。そして黥面絵画と親縁関係にある、霊をつなぎとめる役割をもつとされる弧帯文の発生が瀬戸内地方に求められる以上、それとともに絵画様式が伊勢湾地方に影響を与えたとみるのが妥当だろう。

イレズミの意義 黥面絵画を僻邪を目的にしたものとする以外に、祖先の顔を表したものと理解する余地もある。黥面絵画を用いた儀礼は邪悪なものに祖先がにらみを利かすのを目的としたと考えれば、この二つの理解は矛盾しない。黥面絵画を描いたものに葬送儀礼と関連するものが多いことも、祖先との関係を考えるうえでは不利な材料ではない。

イレズミの意義について民族学による理解をみると、大林太良は東アジア、南アジア、オセアニアの入墨習俗の中で普遍的なのが、入墨に来世へのパスポートとしての働きが付加されることであるとする〔大林 1968〕。激しい苦痛を伴う入墨は、成人になるための通過儀礼の一つとして機能しているところは世界各地にみられ、そうしたところでは「種族の認識票」としての施術を避けるわけにはいかない〔高山 1983〕。来世へのパスポートということは、集団が祖先と同一の入墨をして共同体意識を高めたことを意味しよう。つまり入墨には祖先に近づく通過儀礼の意味があったのではなかろうか。さらに、ポリネシアでは戦闘の際、身元が確認しやすいように種族に特有な入墨がすべての人々に共通になされるという〔高山 1983〕。

『魏志』倭人伝には、「男子大小となく皆黥面文身す」という記載がある。それが男子全員に課せられた通過儀礼であることを重視する吉田晶は、「倭人伝」の「文身」が、3世紀の倭人の男子の部族同盟としての国への帰属とその地位を表現したものであり、同時にそれは戦士としての印であるとする〔吉田 1985・95〕。先にみた上籬子のイレズミをした人物が戦士である可能性や、イレズミに想定される僻邪の機能は、吉田の理解に有利であり、イレズミは男子が成人になるための通過儀礼であり、戦士の表象であるとする考えを支持したい。弥生時代になると鳥形木製品が出現するが、鳥は稲の魂や死者の霊を運ぶ運搬者として信仰の対象になったという解釈がある〔金関 1982, 春成 1987ほか〕。戦士は祖先の仲間入りをして庇護を受けるためイレズミし、鳥に扮して祖先と交信したのであろう。八王子例が黥面絵画Cを描いた板を鳥形木製品に再利用していたことの意味や、今宿タイプの絵画が鳥のような形をしていることの意味もそこに求めたい。『古事記』・『日本書紀』によると、古代に黥面は鳥と関係するものとみられていたようである〔金関 1982〕。

「倭人伝」は倭人の男子は皆黥面文身していたとするが、その後の記述から「黥面」は抜け落ちて「文身」だけになる。そして、「文身」は諸国によって、身分によってその方式が違っていると説明される。深読みすれば、「黥面」には国や身分ごとではない、別の意味があったことになる。3世紀のイレズミの意義を祖先の仲間入りと戦士の表象とした想定が正しければ、黥面絵画Cの共通性は、当時の「黥面」に氏族などの同祖関係や出自集団を表す意味があった可能性が考えられないだろうか。

イレズミ習俗の主体 そうした立場に立ったうえで問題にしたいことの一つは、「男子皆黥面文身」という「倭人伝」の記述を信用するかぎり、農耕民も非農耕民もイレズミをしていたということである。旧稿では黥面絵画Cを描いた主体が海人であることを、『古事記』・『日本書紀』などの史書の記述や絵画の特異な分布から推測した。海人も含めて、史書に登場するイレズミをした集団は、非農耕民である〔吉田 1985〕。このことと「倭人伝」の記述は矛盾しているように見える。しかし、倭人伝にはさらに続けて「倭の水人の文身は大魚や水禽の害を防ぐためのものであった」が、「後に単なる飾りになった」と述べている。吉田のいうように、イレズミは当初は海人の呪的習俗だったが、農耕民にも身体装飾としてその習俗が広まったと理解してよいだろう。そして、やがて衰退すると本来のこの習俗の持ち主である非農耕民に収斂したと考えられる。

そこで二つ目に問題となるのは、3世紀におけるその習俗の広がりがどの範囲までかということと、衰退の状況である。この点に関して、章をかえて述べることにする。

①……………畿内地方の空白

黥面絵画Cの欠落 吉田は、魏の使者が倭国を観察したのは伊都国への駐留時であり、北部九州を中心とした地域の習俗に対してであると考える一方、3世紀の倭人社会は地域的にさまざまな差異をもちながらも、巨視的には弥生後期として総括しうる共通の社会発展の段階にあったとし、黥面と関係の深い文身の習俗は倭人社会全体に及んだと考えた〔吉田 1985〕。しかし、近畿地方から黥面絵画Cの出土は聞いたことがなく、瀬戸内地方及び伊勢湾地方との差が際立っている。現在知られている遺物の分布は見かけのものであるという意見や、畿内地方では弥生V期に絵画土器はほとんどなくなっていくからだという意見もあるが、弥生V期の人面絵画を描いた壺形土器も

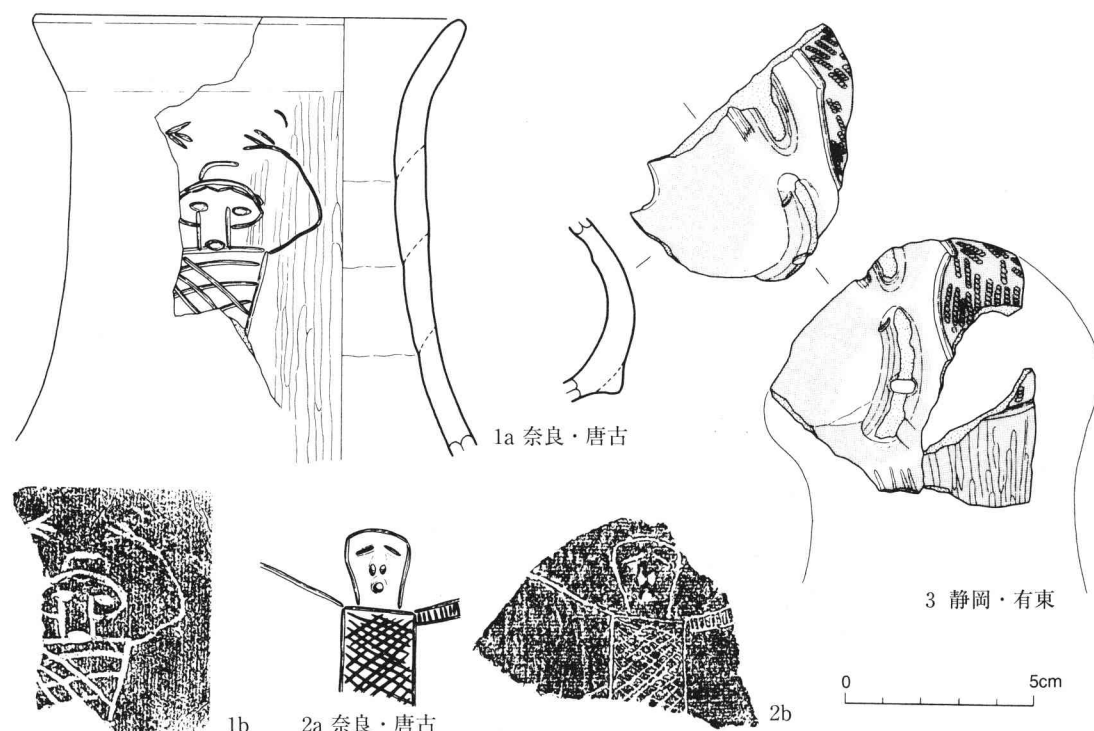


図7 人物絵画土器(1・2)と人面付土器(3)

ないことはない。その人面にイレズミの表現はない(図7-1・2)。このことの意味を東日本の人面付土器をとりあげて考えてみたい。

人面付土器 B 東日本の人面付土器は弥生Ⅱ期に出現する。石川日出志は人面付土器を2種類に分けた[石川 1987]。人面付土器 A は東日本に分布する壺の口縁部に顔を立体的に表現したもので、人面付土器 B は東海地方などにみられる線刻で顔を表現したものである。黒沢浩は A が黥面表現の人面付土器で、B が立体的な顔面表現をとるが顔に沈線文を描かないものとし、人面付土器 B の系譜を岡山県岡山市百間川兼基遺跡の土偶や分銅形土製品など西日本の例に求めた[黒沢 1997]。ここでは黒沢分類案に従う。人面付土器 B は南関東地方に環濠集落が爆発的に増加する弥生Ⅳ期に静岡県静岡市有東遺跡(図7-3)から関東地方南部まで分布するが、これは本格的な農耕集落の拡大期と重なる。大陸系弥生文化の人面付土器といってよい。同時に千葉県多古町新城遺跡では縄文系弥生文化にさかんにみられた人面付土器 A が用いられており、狭い地域の中でも異なる表現と系譜のものを同時に用いる二重のありかたが出現した。

畿内地方の空白 西日本でも京都府向日市森本遺跡や兵庫県神戸市大歳山遺跡の人面付土器、百間川兼基遺跡や岡山市南方(済生会)遺跡、伊福定国前遺跡の土偶、吉備地方を中心に分布する分銅形土製品のようにイレズミを表現しない人面の資料が存在する一方、黥面絵画は描かれる。この二重性は、畿内地方においても亀井例の存在から弥生Ⅳ期まで続いたとみられる。しかし、Ⅴ期以降畿内地方は土器の器面から文様を排除したり、絵画を捨てて記号文を採用するなど、まわりの地方とはやや異なる道を歩みはじめた。3世紀の黥面絵画 C が畿内地方にみられないのは、支配層がイレズミ習俗から離脱したことを意味しているのではないだろうか。中国大陸では、周代にさか

のぼってイレズミは刑罰の一種とされている [仁井田 1981]。伊藤純はそれが5世紀に日本に伝えられたとするが [伊藤 1984]、吉田は「支配層のぼあい、より早い時期に中国の墨刑のことを知り、文身習俗からの離脱を遂げていたと考えている」 [吉田 1985] という。奈良県田原本町唐古・鍵遺跡からは、2～3階建ての楼閣風建物を描いた土器が出土した。弥生Ⅳ期のこの建物絵画は中国の楼閣陶などと比較されるように、漢文化の影響が予想以上に早く強く畿内地方に及んでいたことを物語るとする説もある [広瀬 1996]。吉田は漢人の入墨に対する認識を知った支配者層の文身習俗からの離脱を3世紀以降とみているが [吉田 1995]、3世紀以前、早ければその始動は前1世紀の弥生Ⅳ期にさかのぼることが予想される。

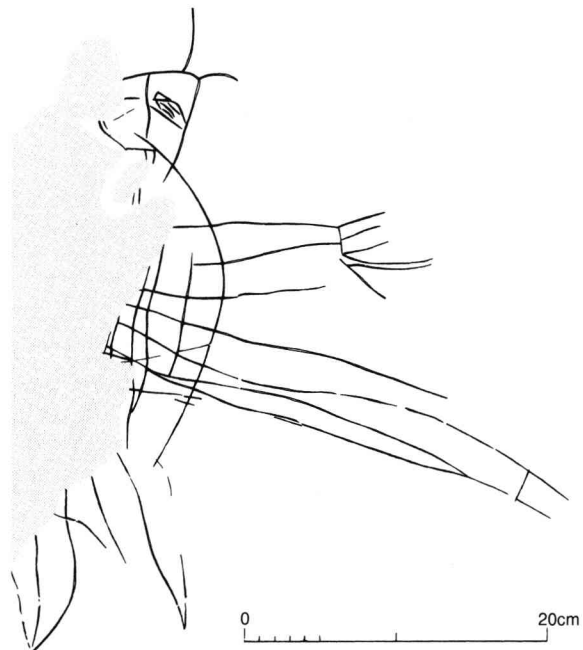


図8 香川・宮が尾古墳玄室奥壁の線刻壁画

したがって、「倭人伝」における「男子皆黥面文身」の範囲は、魏使の駐留した北部九州の狭い範囲のことを敷衍した可能性がある。人面表現における黥面と非黥面の共存は、農耕民の文化と非農耕的文化の二重構造が形になって現れたものであり、この二重性は意外に長い継続性と深い根をもつことが考えられる。そこからの離脱の動きが、畿内地方は他地方に先んじていたのであろう。

おわりに

『古事記』・『日本書紀』に登場する黥面文身のくだりには、イレズミの傷のうみが臭くてかなわないとか、罪を犯した罰としてイレズミをされたのだといった、イレズミを好ましいものと見ていない記述が散見される。古代のイレズミは安曇・久米・蝦夷といったヤマトに迎合しない、非農耕的生業を主とする人々の習俗であった。本稿で、黥面絵画の起源は縄文時代にさかのぼる可能性を指摘し、農耕民の文化と非農耕的文化の二重構造が長い間継続したことを考えるてがかりになった。このことは、日本列島の中の多文化や、権力の異民支配といった極めて大きな問題ともつながりをもつ [設楽 1997]。

香川県善通寺市の宮が尾古墳は6世紀の横穴式古墳であり、石室内の壁面に線刻壁画が描かれていた [笹川 1993]。奥壁に人物がいるが、太刀を帯びた武人であり、この古墳の被葬者の姿を描いたものではないだろうか。拓本をよく見ると、その顔にハの字形の線刻が観察できる (図8)。それとともに船が描かれており、この人物はこの地域の海人とかかわりを推測する手がかりとなる。3世紀に黥面絵画Cが多く分布した地域に、こうした伝統的習俗が残っていることはじつに興味深い。『日本書紀』履中天皇四月条には、阿曇連濱子が野島の浜の海人を率いていたという記載が

あるが、この壁画はそうした海人の首長の姿を彷彿させる。

本稿では、人面の特殊な線刻表現をイレズミと解釈して論じたが、人物埴輪の彩色表現との関係に関してはふれることができなかった。文献と黥面絵画をつなぐ資料として黥面埴輪があり、伊藤純のすぐれた研究があるが、近年群馬県や愛知県、大阪府、鳥根県などで関連資料が急増しており、さらに研究を深める必要がある。また、赤塚次郎らによって研究が進められている、黥面絵画Cなどによってつながりをもつ備讃地方と伊勢湾地方との関係、伊勢湾地方の黥面絵画Cの東進などの政治史的問題にもふれることができなかった。こうしたさまざまな課題を残したままであるが、一応擲筆する。旧稿と重なる記述が多々あったことは御容赦いただきたい。

本稿執筆に関しては、赤塚次郎、天野暢保、江見正己、及川司、大久保徹、岡部裕俊、春日井恒、金森康明、斎藤卓志、斎藤弘之、笹川龍一、佐原真、白石太一郎、鈴木元、辰巳和弘、春成秀爾、樋上昇、広瀬和雄、藤原郁代、宮崎泰史、吉田晶の皆様のお世話になった。記して感謝したい。

1997年8月19日稿

補 論

稿了後に、本稿と関連する以下の資料に接したので、若干の補足をしておきたい。

(1) 岡山県倉敷市上東遺跡出土線刻絵画土器(図9) 波止場状遺構の南東斜面から大量に出土した土器の中に、黥面絵画のある土器が混じっていた〔下澤 1998〕。後期前葉の小型鉢形土器であり、四つの絵画が土器を取り巻くように描かれている。そのうちの 하나가黥面絵画Cである。かまぼこ状の瞳のない目、弧状に向き合うイレズミの線刻と、二重の沈線で描かれた目と同じような形の口からなる。顔の輪郭はない。年代の推定が正しければ、黥面絵画Cでは最も古いものとなり、黥面絵画B(上籬子)とC(仙遊)の間を埋める貴重な資料である。顔の輪郭が省略されている点は、絵画としては整っている亀塚や仙遊例が必ずしも最も古いものではないことを示している。顎のイレズミだけを取り出して描いた朝日例が亀塚例よりも古く位置づけられていることも合理的に理解できる。古いものに顔の輪郭のない絵画があるのは、岡山・津寺や愛知・東上条のような土製品がすでにあり、その顔を土器に転写したためではないだろうか。なお、上東例の他の



図9 岡山・上東遺跡出土土器の線刻絵画

三つの絵画のうち二つは龍と鳥であろうが、もう一つは類例がなく断定は困難である。報告のように悪霊とすれば、辟邪としての黥面を隣に描いたものとしてうまく説明できるが、他の二つを含めた統一的解釈が難しい。イノシシとすれば、黥面以外は想像上のものも含めていずれも動物であり、黥面集団の生業とも関わりをもってくるものと推察されるが、イノシシを顔だけ正面から描いた例はないので、判断しかねる。

(2) 大阪府茨木市目垣遺跡出土人面付土器 土坑の中から中期初頭の土器とともに出土した⁽¹⁰⁾。この人面付土器は瓢形の壺形土器の上半部に人面をつけたもので、頭部は丸く閉じている。人面付土器 B である。こうした例は有東遺跡、神奈川県横須賀市ひる畑遺跡にみられる。また、頭部に鉢巻き状の突帯がつけられる。その類例は千葉県市原市三島台遺跡にみられるが、こちらは頭部が開口している。東海から関東地方の人面付土器 B はいずれも弥生中期後半のものである。そうすると、まず目垣タイプの人面付土器 B が東海地方に影響を及ぼし、さらに弥生中期初頭から関東地方に存在している頭部が開く人面付土器 A と影響しあって三島台タイプが生まれた、という図式が考えられる。いずれにしても、黒沢の予測が裏付けられたもので、人面付土器 B の系譜が明確にされた意義は大きい。

(3) 伝福岡県出土銅戈 福岡市博物館所蔵の中広形銅戈の内に、人面を鑄出したものが2例ある。そのうち伝福岡県出土銅戈の内の人面の裏側には向かい合う弧線を鑄出しており、常松幹雄はそれを上鎌子の黥面絵画と比較して、イレズミの部分だけを取り出して描いた「イレズミが象徴する魔除けの意匠」としている〔常松 1998〕。興味深い指摘である。

(4) 岡山県田益田中遺跡出土の人面付土器 欠失していた口の下半部以下の破片が検出された。土器の腹部でなく、瓢形をなす壺の上位の膨らみに顔を付けたものであることが判明した。全体の形態は神奈川県横浜市上台遺跡例に似たものになるだろう。口の周りの沈線は鴨部川田例や愛知県岡崎市矢作川河床例に近似したものであった⁽¹¹⁾。

1998年7月31日補稿

註

(1)——目頭の付近で眉の下の線と頬の線はつながると予測されるが、特別展のガラスケース越しの観察であるため、確かめられなかった。眉の表現や顎の線とともに、後日観察の機会を持ちたい。

(2)——旧稿〔設楽 1990〕を発表した後、頭部右側の破片が発見された。その部分の実測図を作成させていただき、旧図面に付け加えた。旧図面は複製品を実測したものだが、その機会に実物を観察させていただき、旧図面を若干修正した。

(3)——近年、弥生時代の遺跡の発掘調査とそれにもとづく研究によって、弥生文化の政治的な成長度の高さが強調される傾向にある。たとえば拠点的な環濠集落は人口密度が高く、首長居宅や祭礼の施設が整い、集落の中では農業以外の生業や冶金工業に携わるものなどがおり、首長のコントロールする分業が発達していた、といった

点から、こうした集落はすでに都市的機能をもっていたとされる。弥生時代を古墳時代という階級社会の前史として位置づけ、その政治史的側面を重視すれば、弥生時代を縄文時代から区分する指標として、政治性が大きな意味をもってくる。しかし、弥生時代は農業技術を含む大陸からの新たな文化の選択的受容の濃度や生態系の差によって、日本列島全体に地域差が明確になっていった時代であり〔藤本 1988, 石川 1996〕、列島全体を視野に入れて時代区分し、文化の特徴を明確にすべきである。政治史的視点ばかり強調すると、東日本の弥生文化の特質は見えてこないのではないだろうか。また、東日本ばかりでなく、西日本の中でも政治的社會への急速な歩みをもつ地域とそれが希薄な地域の差も捨象されがちになる。政治史的視点だけを強調する弥生文化観は、山内清男が指摘した弥生文化の三要素〔山内 1932〕の一つだ

けに目を向け、伝統的要素をないがしろにする恐れもある。たとえば東日本の初期弥生文化は、西日本の弥生文化の影響を受けつつも、政治的な統合に向かわない性格をもった独自の農耕社会へと傾斜していった点を重視すべきだろう。北方文化の影響も極めて重要である。そうしたことから、弥生文化は一つでなく、大きく分ければ大陸系弥生文化と縄文系弥生文化〔設楽 1993b〕の二者があったことを重視したい。これは三要素の比重のあり方によって区分されるもので、前者が大陸系要素の強い文化で、後者が伝統的要素の強い文化であり、それぞれ異なる固有の要素が加わって成り立っている。山内の西部弥生文化圏と東部弥生文化圏の概念〔山内 1964〕に近いものである。この概念の導入によって、弥生早期の設定とからむ時代区分の問題や、東日本弥生文化の特質を分かりやすく説明できる。この二つの文化は必ずしも時代的先後関係にあるものではない。本稿の第4章で

触れた文化の二重構造はその一端だが、こうした文化観が提起する諸問題に関しては稿を改めたい。

- (4)——春日井恒氏の御教示による。
- (5)——1990年の論文で根崎遺跡としたものは、東上条遺跡が正しい。訂正する。
- (6)——金森康明氏の御教示による。
- (7)——かつてこれをヒゲの表現だとしたが、斎藤卓志氏の指摘によりイレズミとみたほうがよいのではないかと考えている〔設楽 1995〕。
- (8)——赤塚次郎氏の御教示による。
- (9)——のちに「畿内」と呼ばれる地方をここでは「畿内地方」とする。
- (10)——森岡秀人氏に御教示いただき、奥井哲秀、濱野俊一氏の御配慮により実見させていただいた。
- (11)——江見正己、中野雅美、柳瀬昭彦、山磨康平氏の御配慮で実見させていただいた。

参考文献

- 赤塚次郎 1997「八王子遺跡出土の線刻が描かれた鳥形木製品」『埋蔵文化財愛知』48 愛知県埋蔵文化財センター。
荒巻 実・設楽博己 1985「有髷土偶小考」『考古学雑誌』第71巻第1号 1～22頁。
石川日出志 1987「人面付土器」『季刊考古学』第19号 70～74頁 雄山閣出版。
石川日出志 1996「弥生時代をどのように描くか」『国府台』第6号 1～7頁 和洋女子大学文化資料館。
石黒立人 1994「その他の土器・土製品」『朝日遺跡V』（『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第34集）179～207頁（財）愛知県埋蔵文化財センター。
伊藤 純 1984「古代日本における黠面系譜試論」『ヒストリア』第104号 1～18頁 大阪歴史学会。
大林太良 1968「東亜・東南アジア・オセアニアの文身と他界観」『日本民族と南方文化』711～738頁 金岡丈夫博士古稀記念委員会編 平凡社。
岡部裕俊 1997「福岡県前原市上籬子遺跡出土の人物線刻板について」『考古学ジャーナル』416 7～10頁 ニューサイエンス社。
香川県埋蔵文化財研究会 1992『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度』。
金関 恕 1982「神を招く鳥」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』281～303頁 平凡社。
黒沢 浩 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』416 11～16頁 ニューサイエンス社。
笹川龍一 1993「史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）調査報告～史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業に伴う発掘調査報告書～」普通寺市文化財保護協会。
佐原 真 1997『魏志倭人伝の考古学』（『歴博ブックレット』1）50頁（財）国立歴史民俗博物館振興会。
設楽博己 1990「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 31～69頁。
設楽博己 1993a「弥生時代の農耕儀礼」『季刊考古学』第37号 59～64頁 雄山閣出版。
設楽博己 1993b「稲作の始まりー稲の到来」『考古学の世界』第2巻 106～107頁 ぎょうせい。
設楽博己 1995「中二子古墳出土の人面線刻埴輪によせてー辰巳和弘氏の批判に答えるー」『大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅲ 中二子古墳』91～100頁 前橋市教育委員会。
設楽博己 1997「否定された習俗と祭り」『歴博』第84号 11頁 国立歴史民俗博物館。
柴垣勇夫 1988「原始・古代の土器・陶器にみる絵画文」『日本陶磁絵巻図録』84～90頁 愛知県陶磁資料館。
下澤公明 1998「岡山県倉敷市上東遺跡」『月刊文化財発掘出土情報』191号 ジャパン通信情報センター。
高山 純 1983「身体装飾」『縄文文化の研究』第9巻 242～247頁 雄山閣出版。
辰巳和弘 1992「日本古代の顔面装飾とその系譜」『埴輪と絵画の古代学』81～124頁 白水社。
常松幹雄 1998「伝福岡県八田出土の鋳型についてー福岡市博物館平成六年度（一九九四）収集資料ー」『福岡市博物館研究紀要』第8号 1～14頁。
仁井田 隆 1981「中国における刑罰体系の変遷」『補訂 中国刑法制史研究 刑法』東京大学出版会。
春成秀爾 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集 1～38頁。
広瀬和雄 1996「弥生時代の首長ー政治社会の形成と展開」『池上曾根遺跡史跡指定20周年記念 弥生の環濠都市と巨大神殿』

130～144頁 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会。

- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化 北海道と南島の文化』（『UP考古学選書』2）東京大学出版会。
山内清男 1932「日本遠古の文化－縄紋式以後」『ドルメン』第1巻第9号 48～51頁。
山内清男 1964「日本先史時代概説－縄文式以後の文化」『日本原始美術1』144～147頁 講談社。
吉田 晶 1985「『倭人伝』の文身（いれずみ）について－三世紀の社会構成（その一）－」『歴史科学－創立20周年記念号－』99・100合併号 4～15頁 大阪歴史科学協議会。
吉田 晶 1995「倭人の習俗と社会」『卑弥呼の時代』43～103頁 新日本出版社。
-

挿図出典

- 図1-1：荒巻ほか1985。
図1-2：山陽新聞。
図1-3：国立歴史民俗博物館編1997『銅鐸の絵を読み解く』図1 小学館を改変。
図1-4・図2-2：岡部1997を改変。
図1-5：設楽1990。
図2-3：設楽1990を改変。
図5-1：大垣市教育委員会1994「大垣市埋蔵文化財調査概要平成4年度」（『大垣市文化財調査報告書』第23集）21頁。
図5-2：樋上昇1998「一宮市八王子遺跡出土の人面線刻板について」『考古学ジャーナル』432 9頁。
図5-4：設楽1990。
図6-1：高島忠平1980「佐賀県川寄吉原遺跡出土の鐸形土製品の人物絵画」『考古学雑誌』66-1 47頁。
図6-2：春成秀爾1997「稲祭りの絵」『原始絵画』（『歴史発掘』5）85頁を改変。
図6-3：田中琢『鐸剣鏡』（『日本原始美術大系』4）講談社 118頁をもとに、実物を観察して補正しトレースした。
図8：笹川龍一氏提供の写真をトレース。
図9：下澤1998。
上記以外は筆者の原図を使用した。

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

From Tattooed Clay Figurines to Pictorial Representations of Tattooing

SHITARA Hiromi

Based on analyses of pictorial representations of tattooing, the author intends to approach the social structure during the Yayoi Period. To this end, the author clarifies the spatial and temporal distributions of different types of the pictorial representations.

The Yayoi Period pictorial representations of tattooing are classified into three types : type A where eyes are surrounded by lines; type B where lines originating from the bottom line of the eyes extend diagonally to the lower cheeks; and type C where curved lines extend from the forehead to cheeks. They are commonly found in the middle Yayoi Period, middle to late Yayoi Period, and late Yayoi to early Kofun Period respectively. It is also typologically possible to trace a change from type A to type B and finally to type C. Type A is also found in clay figurines of the early Yayoi Period, which originated from clay figurines of the Jomon Period in eastern Japan.

A subject of some Yayoi Period pictorial representations of tattooing features a soldier in bird costume. Based on general comparative analogy, tattooing was a part of *rite de passage*, and it symbolized the status of a soldier and also his identification with a tribe. It is thus possible to speculate that tattooing during the Yayoi Period was an indication that a young man had joined his ancestor's lineage. A soldier in a bird costume would represent his transformation in order to communicate with his ancestor.

In the Kinai region of west-central Japan, a practice of tattooing was abandoned toward the end of the middle Yayoi Period and in the late Yayoi Period. This was probably under the influence of Han Chinese culture. After that, the practice of tattooing was restricted to those who did not maintain agriculture for subsistence. Further analyses of tattooing will help us to a better understanding about the dual social structure of the Yayoi society where agriculturalists and hunter-gatherers coexisted.
